

ひもを結ぼう ―ダークネスゴールド参上!― 解説編

1. かた結びを行うために必要な力

子どもたちがよく行うひも結びには、かた結びと蝶結びがあります。今回は、より簡単なかた結びを取り上げました。かた結びをするために必要な力は次の4点が考えられます。

- ①結び方の手順の理解
- ②細長いひもなどをつまむ力
- ③左右の手の協調（持ち換え）
- ④左右の弁別（左右のひもの弁別）です。

かた結びはいくつかの手順を経て、結ぶことができる一連の動作です。大人は、かた結びなど何の問題もなくできます。でも、子どもたちにかた結びを教えようとする、「あれ、指をどうやって動かすのか?」と大人がわからなくなることがあります。大人にとってかた結びは無意識でできる動作なのですが、子どもに教えるためにはその動作を一つ一つの動きに分けて、手順化する必要があります。これは、衣服の着脱やボタンかけなどにおいても同じです。

ひもを持つためには、指先の巧緻な運動が必要になります。親指と人さし指で細長いひもをつまむ力です。みかんやキャンディなどのように丸くてつかみやすいものではなく、ひものような細長くて、曲がるものをつまむことは子どもたちにとって難しい課題となります。

ひもを結ぶ手順の中には、「左右の手で持ったひもを持ち換える」動きがあります。これも子どもたちにとっては難しい動きといえます。左右の手を協調して動かせる力が要ります。

かた結びをするには、ひもの両端を持ちます。そのため、左右の手に持ったひもを弁別しなくてははいけません。特に、ひもが交差するときには左右が逆転するため、2本のひもの違いを弁別することが難しくなります。このような場合、ひもの先に色を付けておくと、わかりやすくなります。

このように、かた結びは簡単そうで難しい課題が含まれています。子どもの実態から、かた結びがまだ難しいと判断されるときには、「結びの指導」ではなく、「結ぶことに代わる指導（代替の方法）」を教えることも必要になります。例えば、ひもを結ぶ代わりにマジックテープにする方法などが考えられます。

2. かた結びの手順

放送の中では手順は以下のように紹介されていました。

1. 机の上にひもをまっすぐ横に置く。右が赤、左が青の色がついている。
2. それぞれの手で両端を持ち、ひもを交差させて「×（ばつ点）」をつくる。赤が上、青が下になるように交差させる。
3. 赤いひもの端を、「向こうからぐるり」と回して下から出す。
4. ひもの赤い部分と青い部分を左右に引っ張る。
5. 同じ動きを繰り返せば、かた結びの完成です。



3. 指導するときの配慮点

放送では、かた結びができなくて、自分の思い通りにならないゴールドは「やってられるか!」と言って、「ダークネスゴールド」になりました。一人ではうまくできないことを何度もすることになると、失敗感ばかりがたまりまゝ。その結果、自信を無くしてしまい、自己肯定感が低くなってしまいます。指導のポイントは、子どもが「できた! やった!」という達成感をおぼえることです。そのために、スモールステップで手順を考え、いろいろな配慮をすることが求められます。

ひも結びの学習では、ひも以外のものは使用しません。そのため、どんなひもを使うかが重要なポイントになります。コマ回しに使う太目のひも位が一番使いやすいかと思います。逆に、糸やバロンテープ（運動会のポンポンの材料）などの細いひもは、結びの練習に適していません。

放送ではひもの左右が、中央から赤色と青色に分かれたひもを使用していました。このようなひもを入手するのは難しいので、通常のひもの端に色を塗ったり色テープを貼ったりするとよいでしょう。

子どもたちの中には、ことばの指示だけでは「手順の理解」が苦手な子どもがいます。そのため、手順の一つ一つをイラストにして示すと結び方が分かり易くなります。教員が実際に結ぶところを見せるモデル提示も良い方法です。最も有効な支援は動画を見せる視覚支援です。手順の一場面ずつを撮影した動画は、見ながら模倣することで、結ぶことが成功しやすくなります。また、同じ場面を何度も見るとこができるので良い練習になります。ストレッチマンの結び方の動画をぜひ活用してみてください。

はちまきを結ぶときは、頭の後ろで結ぶため手元が見えません。そのため、子どもたちにとっては最強に困難な課題になります。その点を克服するため、放送された中の松江市立意東小学校では、自分のはちまきでなく友だちのはちまきを結んでいました。個人のひも結びスキルの向上とともに、友達との協力関係を作ることができる素晴らしい指導だと思います。

ひもでうまくできるようになったら、タオル、日本手ぬぐい、風呂敷などで試してみましよう。そのあと、結んだひもを「ほどく」学習もやってみましよう。

4. 遊び案について

かた結びを練習し始めて、少し結べるようになった子どもたちに適した遊びです。

1. ネックレスを作ろう

これは、特別支援学校などでよく行う活動です。ひもに、ビーズ、短く切ったストローなどを通してネックレスを作ります。ひもの操作（指先でひもをつまむ、ひもを穴の中に入れる、両手でひもを持ち換える）の練習になります。

ビーズなどは持ちやすい大きさのものを準備します。カラフルで穴が開いているものならビーズでなくても使えます。子どもの好きなキャラクターが付いたメダルなどを入れると、作る意欲が高まると思います。ひもは、やや太めのひもを使いましよう。ひもの先にセロテープをまいて固くしておく、通しやすくなります。また、一方のひもの先にビーズ球をくり付けておくと、通したビーズ球がひもから落ちなくなります。

飾りのビーズ球を通し終わったら、両端のひもを結んでみましよう。首にかけるだけの長さを保ってかた結びを作るのは難しい活動になります。かた結びに慣れていない子どもには、大人が代わりに結ぶようにします。



2. タオルで玉入れゲーム

タオルでかた結びを2回作ります。すると結び目ができて、直径10cmくらいのタオルボールになります。かた結びが結べるようになってきた子どもに適した活動です。タオルは薄手のタオルにします。日本手ぬぐいなどでもいいでしょう。厚手のタオルだと結びにくくなるので気を付けてください。2回目のかた結びが難しい場合には、1回のかた結びだけでもいいと思います。作る個数は、子どもたちの実態に応じて決めてください。

ここまでがかた結びの練習で、後はいろいろなゲームに応用できます。作ったタオルボールで、玉入れ、キャッチボール、ペットボトル倒しなどをして遊びましょう。放送では、床に描いた円の中にタオルボールを入れる「玉入れゲーム」をしました。

